草創期の各部局

文理学部

学生定員 105 名（文学科 65 名、理学科 40 名）

官立山口高等学校（旧山高）を母体として山口市糸米（現在の県立山口高等学校の敷地）に誕生した。その後、文理、経済、教育の3学部を山口市の中央地区に集めるため、後河原の新制山口高等学校東校舎跡に昭和29（1954）年10月に校舎を新築し、移転した。

糸米時代の文理学部講堂（昭和24年頃）

なお、教養部が設立される昭和41年までは、文理学部が全学の一般教養課程を担当し、その授業は文理学部、教育学部、経済学部の教官によって行われた。

後河原に移転後の文理学部校舎全景

教育学部

学生定員

4年課程 160 名

第 1 中等教育科 80 名（山口 50、防府 30）

第 1 初等教育科 80 名（山口 80）

2 年課程 400 名・・・後に廃止

第 2 中等教育科 200 名（山口 60、光 80、防府 60）

第 2 初等教育科 200 名（山口 80、光 120）

教育学部正門

官立山口師範学校と官立山口青年師範学校本校を母体として、山口市に本校を、光市及び防府市に分校を置き、3か所に分散して発足した。設立当時は生活の困窮という世情を反映して定員割れの状態が続いたが、昭和27年頃から定員を満たすようになった。

また、昭和24年に公布された「教育職員免許法」及び同法施行規則に基づき、戦前の免許を有する現職教員に、上級又は異種の免許状が得られるよう、県主催の免許法認定講習（現職教育講座）が昭和25年から本学において行われ、教育学部が中心となって授業を受け持った。ちなみに、昭和26年の実績は講座数120、受講生3,701名だった。

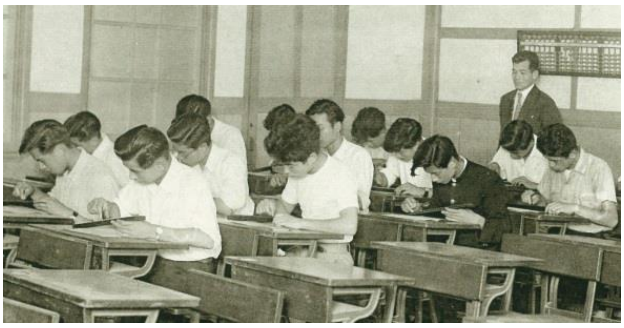
経済学部

学生定員 160 名（経済学科 80 名、経営学科 80 名）

官立山口経済専門学校（山口経専）を母体として誕生した。山口高等商業学校時代から引き継がれた伝統を基に、早くから大学院設置の全国運動を展開した。結果として大学院構想は結実しなかったが、昭和29年に経済学専攻科及び商業教員養成課程が開設された。

併設された門標

経済学部校舎全景



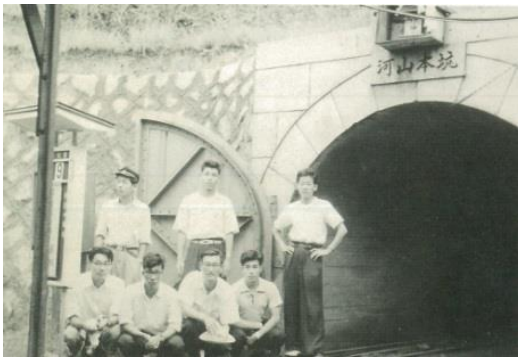
算盤の授業

工学部

学生定員 120 名
（機械工学科 40 名、鉱山学科 25 名、
工業化学科 30 名、土木工学科 25 名）

官立宇部工業専門学校（宇部工専）を母体とし、4学科でスタートした。新入生は山口市で一般教養課程を修め、第2学年後期以降は宇部市において専門課程を履修した。

戦後の経済発展の基盤として、工業立国の必要性が叫ばれた時勢に乗り、昭和28年に工業短期大学部が併設されたのを皮切りに、昭和30年代以降次第に整備拡充されていった。



（上）**工学部本館前庭**
（下）**河山本杭実習**

農学部

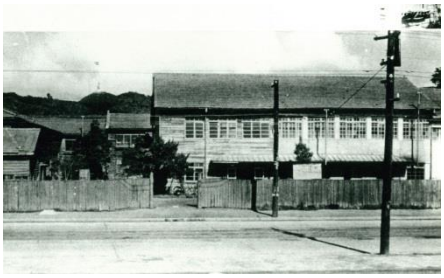
学生定員60名(農学科30名、獣医学科30名)

母体である山口県立山口獣医畜産専門学校(山口獣医専)が、開学前年の昭和23(1948)年12月に吉敷郡小郡町から下関市長府町へ移転していた。そのため、新入生は工学部と同様に山口市で一般教養課程を修め、翌年の秋から下関市の農学部校舎で専門課程を履修した。

長府時代の農学部校舎前景

附属農場は清末農場の他に乃木浜農場と才川農場が新設され、実験結果を基に干拓地における水稲栽培に貢献した。また、附属家畜病院は昭和28年に官制化され、昭和30年には下関市中之町に分室が設置された。

附属乃木浜農場



獣医学科校舎

実習

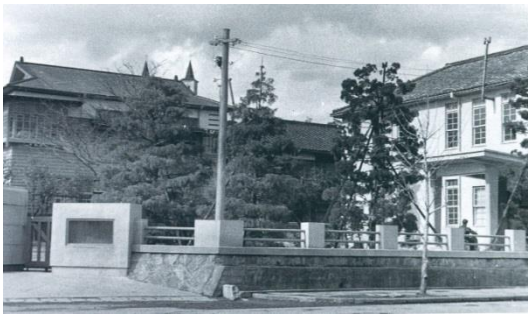
本部・図書館

開学に伴い、国立学校設置法施行規則第5条により事務局及び厚生補導に関する部が設置され、庶務課、会計課、施設課、補導課及び厚生課が置かれた。発足当時の本部は経済学部構内(山口市亀山)にあったが、昭和28(1953)年に教育学部の寮を改造した山口市新道の庁舎に移転した。

また、図書館は国立学校設置法第6条により附属図書館として設置されたが、本館は文理学部に間借りしており(昭和26年に経済学部に移転)各分館・分室は旧制高校・専門学校の図書館をそのまま引継いだ。

昭和24年10月現在の全学教職員数は、教官282名、事務職員346名で合計628名だった。

発足当時の本部(経済学部構内)



山口市新道に移転後の本部

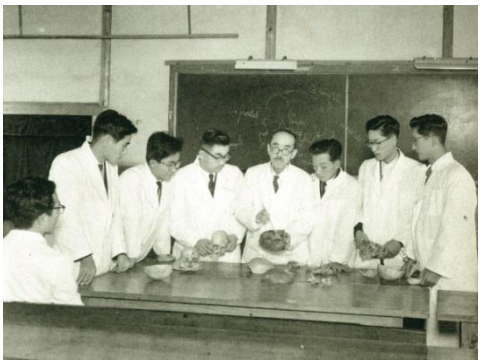
独自の道を選んだ医学部

山口大学が開学した頃、医学部の前身校である山口県立医科大学においては、戦後の医専存続問題から脱して大学への昇格が認められ、昭和24（1949）年5月7日に附属病院の落成式と併せて盛大な開学式を挙行したばかりだった。

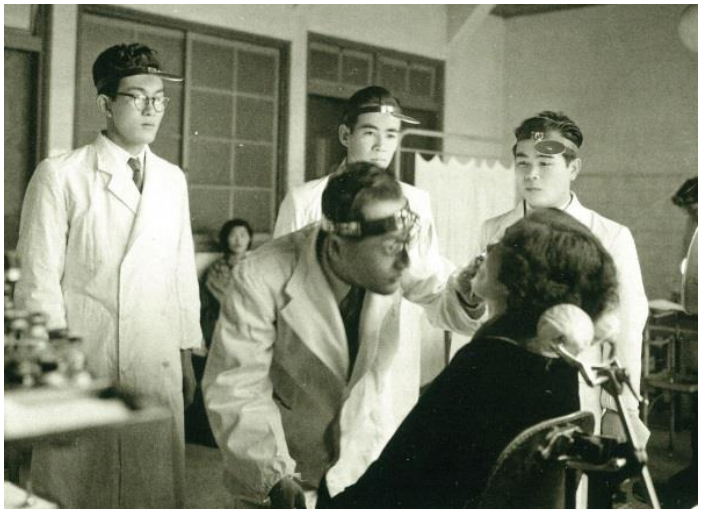
その後、昭和26年に山口県立医科大学（旧制）を新制大学として認可申請した際、文部省は国立への移管を強く要望した。当時、戦時中に開校された医専で、戦後A級指定を受け、廃校を免れ、医大（旧制）に昇格したものが全国に数校あり、文部省はそれらを国立移管する方針で、それぞれの所在地の国立新制大学に統合するよう指導していたのである。

しかし、当時は大学の自主性が尊重されたので、どの途をとるかは度々開かれた教授会で検討された結果、このまま県立医大として進み、国立移管はしない方針が決定された。

昭和27年4月に新制大学として新たなスタートを切った山口県立医科大学は、昭和39年に国立移管されるまで、厳しい財政下にありながらも大学院設置や病棟拡大など、医療の充実に向けて奮闘することとなった。



（上）**解剖学実習**
（左）**開学した頃の山口県立医科大学校舎**



（上）**病院実習（耳鼻科）**
（右上）**内科臨床実習**
（右下）**医科学実習**